

中國古代における日の暈と神話的圖像

林 巳奈夫

一九八六年、四川省成都市の北約四〇キロの広漢県三星堆遺蹟で二つの祭祀坑が発掘された。地方色の濃い青銅像、玉器、象牙、動物の骨などが大量に投入されてをり、遺物にみな火で焼かれた痕がある所から、燎のごとき火で焼く祭祀に使つたあとの残りを埋めたものと推測されてゐる。ここで最初にとり上げる「神樹花果」は第二号坑の出土であるが、年代は同出の遺物から殷末ごろのものと考えられてをり、^①大体その辺のところと見てよいと考へる。神樹は壊れて出土したが三本分あり、二本は大、一本は小、と報告される。これらは四川省文物管理委员会等一九八九、一一頁および陳頭丹一九八九、二〇頁の記述によると次のごときものである。

大型の二本の内K2、194の方は基部にラッパ状の座がある(図1)。それには三枚の鐺状のものがつき、その間に透彫がある。鐺の間に外に向つて坐る高さ二〇センチの人像が配せられ、人像

は方形の台の上に載る。現在二体であるが、もとは三体あつたらう、といふ。主幹は太さ七・五センチ、台座の上方一六センチの所に僅かに上向になつた三本の枝が出る。この方のものと全高については発表されてゐない。頂上に付けられた「花果」は図2がそれらしい。次のものの復原品に付くのは図2と形がやや違ふから、二本ある内から消去するとこれしか残らないからである。

もう一本のK2、192の方もラッパ形の座の上方一〇センチの所にやや上向の枝が三本出る。幹は復原高三・五メートル以上に達する。成都の四川省文物管理委员会の建物の中庭に一九九〇年九月に建造中であつた復原模造品(図3)はこの方である。台座の形が平たため、図1と異なるからである。

小型のものは登記番号が発表されてゐないやうであるが、陳頭丹氏によると次のごとくである。比較的小型で、二本の木が枝を繩のやうに絡み合せて立ち、鳥身人首神がこの樹の上にとまつて

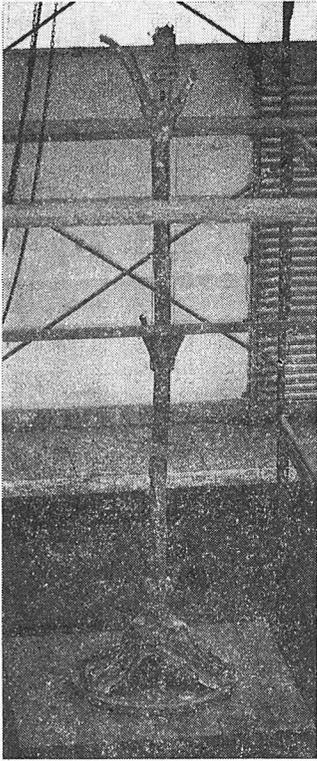


図3 青銅神樹花果模造品，四川省文物管理委員會中庭

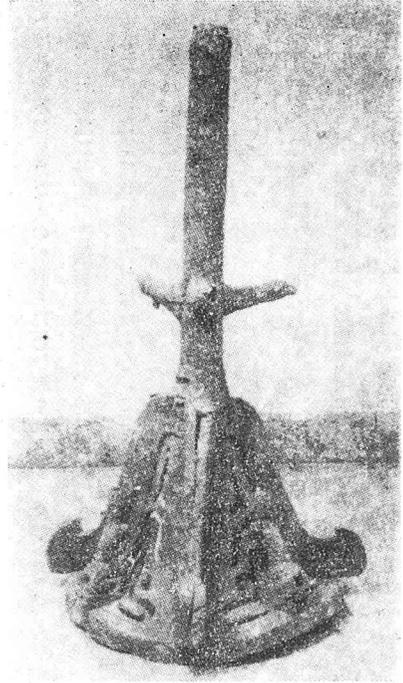


図1 青銅神樹の座，廣漢三星堆2号坑

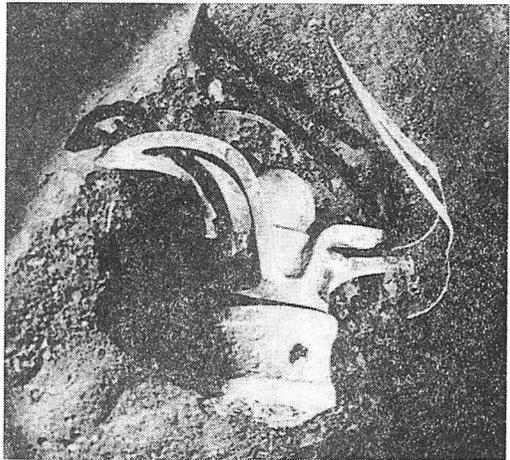


図2 青銅神樹花果，廣漢三星堆2号坑

るた、と。
二本の大型の樹についてはまた総括的に次のやうに記される。すなはち、これらの木の上には枝、葉、花、果実、飛禽走獸と鈴が飾りつけられてゐた、と^⑤。また樹枝には直径約九・六センチばかりの玉環、銅環、琮形器等が掛けられてゐたとも記される。^⑥
これらの樹の詳細な作り、特にそれに付け

られてゐたといふ鳥獸、瓊、鈴等については正式な発表のない現在、これ以上のことは知られない。筆者がここで注目したいのは、大型の二本の方の、真直な高い幹の頂上に大きな「花果」のついた、その樹木としては異常な形態である。

発掘者の陳頭丹氏は『山海経』等に出てくる尋木、若木、建木等の記述を引き、これらの樹をその類と考へてゐる。これらの木の出土遺蹟からそれを宗教と関係あるものと考へ、これに付けられてゐた鳥、動物、鈴、瓊等が祭祀に當つてそれに掛けられたとし、文献に出てくるそれらの木をこれに當つたのである。見当はその方向で良いと考へる。然し『山海経』に出てくる神話的な木はそれらに限られない。また宗教に係りのある木といふと、別に例へば社の木のやうなものが直ちに思ひ起されよう。必要なことは、先づ三星堆二号坑の青銅製の樹木が、他の樹ではなく、特定の若木等の類に當てられなければならないことを論証することであらう。次にこれを試みる。

『山海経』大荒東経に扶木が記される。そこには次のやうにある。

大荒之中有山、名曰擘搖類瓶、上有扶木、柱三百里（柱猶起高也……〔以下『山海経』引用文の括弧内は晋の郭璞の注〕、其葉如芥、有谷曰温源（温源即湯谷也）、湯谷上有扶木（扶桑在上）、

一日方至一日方出（言交会相代也）、皆載于鳥（中有三足鳥）

と。すなはち中国から遠く離れた所に山があり、擘搖類瓶と呼ばれる、上に扶木がある。高く立ち上ること三百里である（柱といふのは高く立ち上るといふやうな意味）。谷があり、温源と呼ばれる（温源はすなはち湯谷である）。湯谷の上に扶木がある（扶桑が上にある）。一個の日が到着すると一個の日が出發する（互ひに出会つて入れ替るのである）。みな鳥をのせてゐる（中に三足の鳥がある）、とある。よく知られる話であるが、扶木が「柱すること三百里」とあることが注目される。柱のやうに立ち上り、長さが三百里といふ大変な高さといふ。三星堆の「神樹」のひよろ長い柱状の幹が想起される。注に扶木を扶桑と言ひかへてゐる。『山海経』の海外東経に

上有湯谷、湯谷上有扶桑

と、すなはち下に湯谷があり、湯谷の上に扶桑がある、と湯谷の上にある木を扶桑と言つてゐるからである。扶桑はまた樽桑とも書かれた。『説文』桑部に

桑、日初出東方湯谷所登樽桑、桑木也

と、すなはち、桑は、日が東方湯谷に出て登る所の樽桑で桑木である、とあり、湯谷の所で日が登る樹は樽桑とも書かれ、それが桑木と呼ばれたのである。桑木は若木とも書かれる。『山海経』

大荒北經に

大荒之中有衡石山九陰山洞野之山、上有赤樹、青葉赤華、名曰若木（生昆侖西、附西極、其華光赤下照地）

と、すなはち、中国から遠く離れた所に衡石山、九陰山、洞野之山があり、上に赤い樹がある。青い葉と赤い花が付き、若木と呼ばれる（昆侖の西に生え、西の天の極（棟木）に附いてをり、その花は赤く輝き、下の大地を照す）とある。郝懿行は『山海經箋疏』にこの郭璞の注は本来本文であつたものが誤つて注とされてゐることを証してゐる。扶桑の別名であつた若木が中国の西、遙か遠い所にあつたといふのである。この中国の西の果にある方の若木は日の沈む所にある。『淮南子』墜形訓に

若木在建木西、末有十日、其華照下地（末、端也、若木端有十日、状如蓮華、華猶光也、光照下也）（以下『淮南子』引用文中の括弧内は後漢の高誘の注）

と、すなはち、若木は建木（建木については注⑨参照）の西にある。梢に十の日があり、その光は下の大地を照す（末とは端のことである。若木の端に十の日がある。その有様は蓮の花のごとくである。華とは光といった意味である。光がその下を照すのである。と。東から到着した日が十個梢にあるといふ。日はまた東から天に昇らねばならない。順にここから降りると考へられたに相

違ない。ここには日がそれを伝つて沈むとは書いてないが、昇る時には扶桑を「登る」とある。前引の『説文』の桑の条にさう記され、また『淮南子』天文訓に

日出于暘谷……登于扶桑

と、すなはち、日は暘（湯）谷より出……扶桑に登る、とある。扶桑を伝つて登つてゆくとして解される。西方の若木の場合もこれと逆に、この木を伝つて下降したと考へてよからう。

以上、中国の東と西の遙か遠い所に扶桑、若木と呼ばれる恐ろしく高い柱状の木があつて、その先端には蓮の花のやうな光り輝く花があつた。そしてそれを伝つて日が天に昇り、また天から降つた、と考へられてゐたことが知られた。これは西暦紀元前一千九百年の晩い時期から紀元後二、三百年の頃に今の形をとつた文献の中の資料であるが、この木はそれより千年ほど遡る時期の三星堆の細長い柱状の幹の上に大きな花をつけた「神樹」そのものである。形に小異のあるものが二本出てゐる。或いは夫々東と西の若木に当ると考へることもできよう。

さて、このやうに三星堆の神樹が後世の記録にのこる若木と同じ性格の木だといふことが証明できた、といふことは別にどうといふこともない。これについて筆をとつたのは、そのやうな木は何と神話の世界に留らず、運がよければ現代の我々も目で見る

図4 太陽柱, Greenler
1980 より

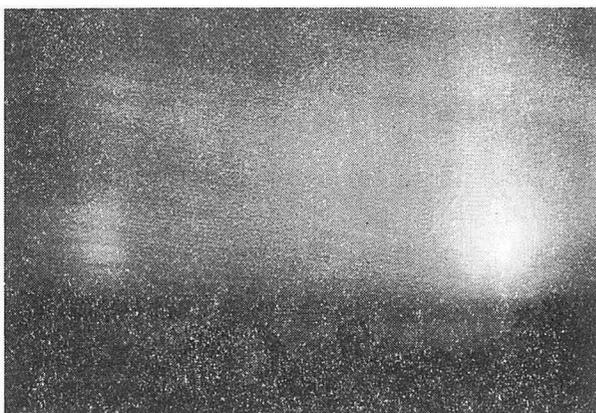
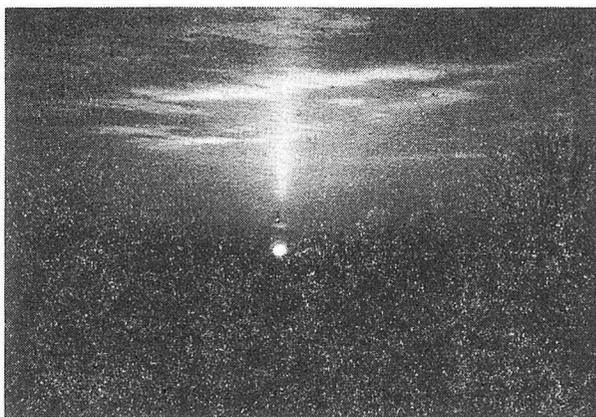


図5 太陽柱と幻日, その
コンピュータ・
シュミレーション,
Greenler 1980 より



ことができる、といふ驚きを伝へたいためである。図4、5は太陽の暈の一種である太陽柱の写真である。日の上下に光の柱が立ち、日の昇るにつれ柱も昇る。日は太陽柱を伝つて昇る。図6の太陽柱の上には三星堆の神樹の「花果」に当るものまで写つてゐるではないか。もとの写真はカラーで、太陽柱は夕焼色に赤い。

『山海經』大荒北經に若木について「赤樹」とあつたのはこれである。上の花は下が赤く上が青く、虹の一部のやうな色合を帯びてゐる。『淮南子』墜形訓にその花の光がその下を照す、とあつた。地平線近くで太陽柱が現れ、それに沿つて太陽が天に昇り、またそれに沿つて沈むのを見て、古人が恐ろしく高い赤色の木の幹が東西の遙か遠くの世界の果にあり、それを伝つて日が昇り、降ると考へたのは全くもつともなことである。

我々は暈といふと太陽の周囲を囲む円い暈を思ひ起し、筆者はごく最近まで他にも各種があることを知らなかつた。図7は正野一九五八より転載したものである。太陽柱はこの図のLしで、それとDDの交点の所が太陽である。図6の太陽柱の上方の花の形はEEの上端切弧である。

ここに引いたやうな太陽柱とか上端切弧も含めた各種の暈の現象は、歴史時代に入ると善悪のきざし、吉凶を天が人間に示すものとして政府の専門の官によつて常に観察されてゐた。『周礼』

春官、眡祲がそれである。しかしそこに挙げられた十種類の暈、即ち暈の中から今問題のものゝ確かに決める名称を見出すことはできない。しかし他のテキストにはある。『開元占経』巻七、日占三に「日直」の項があり、

石氏曰、日直赤丈餘、正立日月之傍、名爲直、其分有自立者、すなはち、石氏曰はく、日の直は赤くして丈餘、日月の傍に正立す。名づけて直となす。その分るるは自立するものあるなり、と。真直で赤く、立つてあるといふのはよいが、「傍にある」といふと上下の端にあると取れないこともないが、左右に二本あるやうにも取れる。同所にはつづいて

夏氏曰、日直、直者正直在日上下左右、主直臣自立也……

と、すなはち、夏氏曰はく、日の直。直とは正直にして日の上下左右にあるなり。直なる臣の自立するを主る、と。日の上下と左右にあるといふ。それを図にしたのが図8である。上下にあるといふのは前引の太陽柱に相違ない。左右にあつて直立するといふと、図10に引いたシュミレイションの図でペリー弧の40°の欄の兩側に斜めにあるやうなものに当らうか。なほこの図の中の実線の円は日の内暈（図7、A）の範圍を示す。図9に引いた『管窺輯要』では今の「直」が直虹と呼ばれてゐる。

太陽柱について「ごく寒い地方に起る」と記されるが、中国世

界で太陽柱が観察されてゐたことは以上によつて明かであらう。

図6で太陽柱の上に現れてゐた上端切弧は「戴」と呼ばれてゐる。『晋書』天文志、中に

日戴者、形如直状、其上微起、在日上為戴、戴者徳也

と、すなはち、日の戴とは形は直の状のごとくして、その上微かに起ち、日の上にあるを戴となす。戴とは徳なり、と。「直」の状のやうだといふのは前引の二種の直の内、真赤でない方、後者を指すと思はれるが、上が少し持ち上つてゐるといふから、当然縦でなく横向になつてゐるのである。図11のAのバリー弧ないし、バリー弧と上端切弧の合はさつたB、Cのやうなものがこの『晋書』天文志の記述と合ふと思はれる。以上により、図6の太陽柱の上方に現れる上端接弧ないしこれとバリー弧の重なつた暈が中国世界で注意されてゐたことが知られたと考へる。

太陽柱と係りの考へられる伝説としてはもう一つ銅柱、昆侖山がある。『太平御覽』三八所引の『神異経』に

崑崙有銅柱焉、其高入天、所謂天柱也、围三千里……

と、すなはち、崑崙に銅柱あり、その高きこと天に入る。所謂天柱なり。围は三千里……と。前引大荒西経の若木は昆侖の西に生えてゐた「赤い樹」であつたが、これは銅の柱で昆侖に立つとい

ふ。これも同じ真赤な太陽柱が核となつた伝説に相違ない。また昆侖の上に立つのが柱なのでなく、昆侖山そのものが柱状だといふ話もある。郭璞の『山海経図讚』に

昆侖月精、水之靈府、惟帝下都、西老之宇、嶮然中峙、号曰天柱（郝懿行の『箋疏』にいふごとく柱は柱の誤り）

と、すなはち、昆侖は月の精であり、水の靈府である。また天帝の下都で西老（西王母）の家である。によつきりとそびえ立つてゐて、天柱と呼ばれる、と。図12は沂南画像石墓の墓室入口の左の柱に刻まれた西王母（左）と東王公（右）の像である。いづれも上下に拡がつた柱の上に坐り、同形のものの上に坐つた鬼および仙人が左右にゐて、薬を搗いてゐる。夫々の三本の柱状のものは下でつながり、その基部と柱の上にも尖つた山峰が刻されてゐる。この柱状の部分も柱ではなく、山の一部として画かれてゐるのである。これが郭璞の『山海経図讚』に天柱と号される、といふ昆侖山であることは疑ひない。しかし以前から考へてわからなかつたのであるが、昆侖山はなぜこのやうな柱状の、しかも普通の柱ではありえない、中細りの形をとつてゐるのか、である。それは、これが太陽柱を原形とするものだからなのである。図5のシュミレイシヨンの図は丁度図12の原形にふさはしい形である。図12でこのやうな形の昆侖山の上に坐るのは典拠があるに

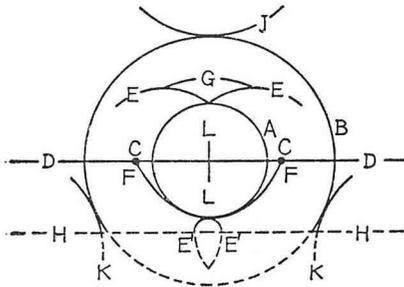


図7 暈の各種、正野1958より、A: 内暈, B: 外暈, C: 幻日, DD: 幻日環, EE: 上端切弧, E'E': 下端切弧, F: ローウイツツの弧, G: パリーの弧, HH: 地平線, J: 天頂環, K: 切線弧, LL: 太陽柱

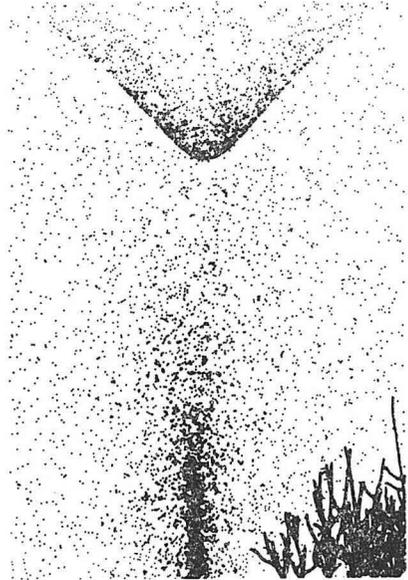


図6 太陽柱と上端接弧, そのコンピューター・シュミレーション, Greenler 1980 より

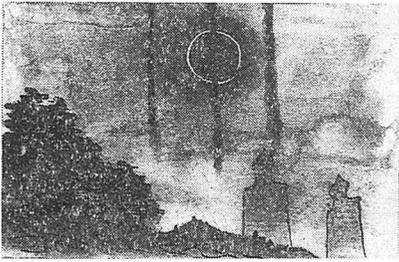


図8 日の「直」, 『天元玉曆祥異賦』

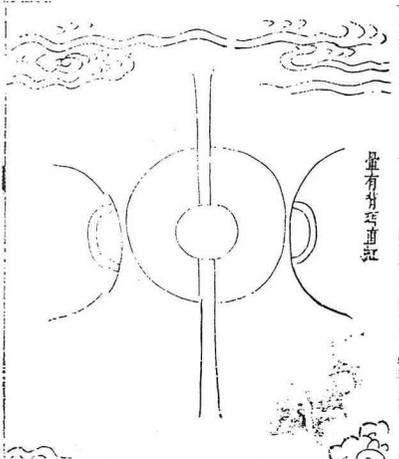


図9 日の直虹ほか, 『管窺輯要』より

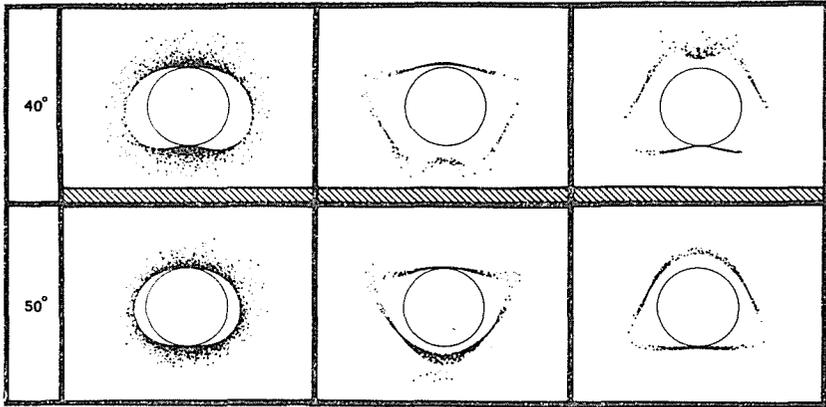


図10 左より外接弧, パリー弧, 入れ替りパリー弧, Greenler 1980 より

しても、世界の東の果にある東王公までが昆侖山と同じ形の山の上に坐るのは、西王母になぞらへてのことだらうかと考へてゐた。しかし西王母の坐つてゐる

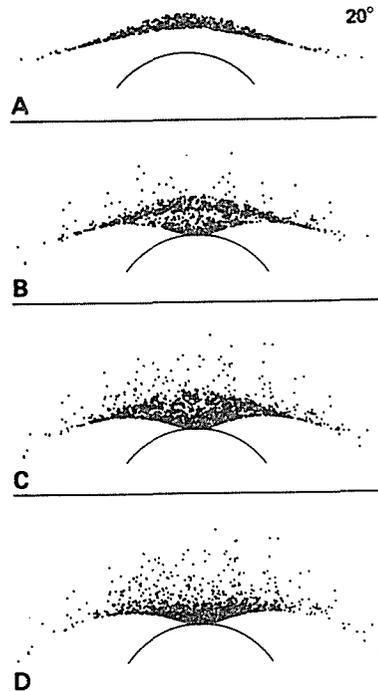


図11 20°に昇つた太陽のパリー弧(A), 上端接弧(D), と両者の複合(B, C), Greenler 1980 より

のが太陽柱を原形としたものであるのなら、太陽柱は東方の日の出の際にも現れるのであるから、当然さうあつてよいことだ、といふことにならう。

さて、日が東方に現れた柱状のものの中から現れ、それを伝つて天に昇つてゆき、また西方に現れた同様のものを伝つて天から降つてゆく。これは日常誰もが目にすることのできるものでないとはいへ、『墨子』明鬼篇の言葉を借りれば、そこに居合せた者で見ない者はなく、遠い者で聞かない者はない、明々白々たる事実である。天上の神もそれを伝つて上下することは毫末の疑ひも



図12 西王母，東王公の坐る山，沂南画像石墓



図13 神農，蒼頡と建木，三段式神仙鏡

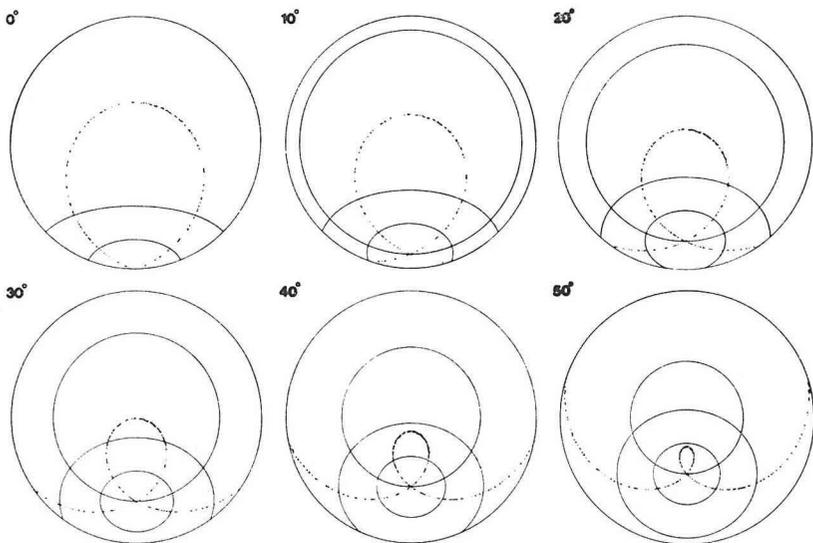


図14 日面通過弧のコンピューター・シュミレーション, Greenler 1980 より

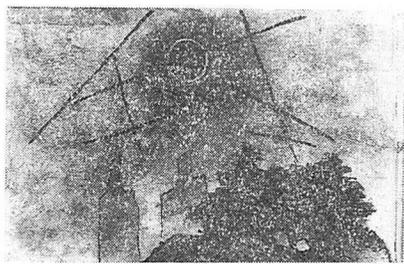


図15 日の気が日を交り貫く図, 『天元玉曆
祥異賦』

に漢鏡の図柄について考察した際、神農、蒼頡と共に表はされる
る樹(図13)について、それを建木と考へた^⑧。そこに坐つてあ
るについては、伝つて降りて来た木と一緒にかき添へた方が、そ
こに坐つてゐることを理解し易いと考へられたからではないか、
といふ解説をついでに付け加へた方がよささうである。なほ建木
は注⑨に記したやうに世界の真中にあるもので、枝が曲りくねつ
てゐるとされる。曲りくねつた枝といふのも、或いは天頂の周辺
に観察される暈(図7J、B、図14)に由来するものかとも考へ
られるが、今まで記して来たもの程には確信が持てない。

もう一つ、扶桑については一つの根から幹が二本でて倚り合つ

なかつたであらう。銅柱のある、
ないしは柱の形をした崑崙山が帝
の下都とされるのは、天上にゐる
帝がそれを伝つて降りて来ると考
へられたからである。東西の世界
の果にあるのではないが、他に注
⑨に引いた、百仞にわたつて枝の
を通り過ぎたとか、衆帝がそこか
ら上下した、と言はれてゐる。先

てゐるといふ所伝がある。『文選』思文賦「夕余宿乎扶桑」の李善注に引かれる『十洲記』に

扶桑葉似桑樹、長莖千丈、^⑭大二千圍、兩々同根生、更相依倚、是以名之扶桑

と、すなはち、扶桑の葉は桑に似、長さ千丈で太さは二千人で手を拡げて囲む太さである。二本が同じ根から生え、さらに倚りかかり合つてゐる。そこから扶桑と呼ばれる、といふ。右に引いた類の鏡背紋の中の建木の中には幹が繩のやうに燃れてゐるものもあるが、このやうな形では「相い依倚する」とは言へないであらう。しかし図13のやうに軽く一度交る表現もある。このやうな形のもとになつたかと疑はれる暈であればないことはない。図14のとき *halbac arc* (以下日面通過弧と訳す) がそれである。この図は天頂を中心に、魚眼で見た形に投影されたもので、外の円が地平線、その内が幻日環、下方の二重の円が日を囲む内暈および外暈である。点々で示されたのが日面通過弧のシミュレーションである。∩字形を画く曲線の交点が太陽である。この暈は左右から二本の線が交はり、日と共に天に昇つてゆくわけである。太陽柱が木になぞらへられたのと同様にして、これが相ひ依る二本の木の幹で、これが扶桑であり、それに依つて日が天に昇る、と考へられたことはありうることと考へられる。この日面通過弧の

漢時代頃の名称は鑄であつたと考へてゐるが、この名で呼ばれた暈については諸説があり、説明に紙数を要することになるのでここには詳論できない。また後世の暈の図でどれがそれに当るかも今の所断言できないが、『天元玉曆祥異賦』の「日氣交穿貫其日占」^⑮の図(図15)がそれに當らう。

ここでもう一度三星堆の青銅製の神樹花果にもどり、頂上の花についてもう少し研究してみよう。この花は中央に蕾のやうな形のものがあり、側から外反りの花瓣が出てゐる。これと同じものは同じ三星堆二号坑から出土した饜饕形の青銅製品(図16)の額の中央にも立つてゐる。スペースの都合があつてか、花瓣は短かめで反りが少い。同じ形はまた同じ坑から出土した青銅立人像の冠の最上部中央およびその台座の上部、銅像の立つ方形の板の正面小口にも見出される(図17右上、右下)。冠の方は側面に出た花瓣の先が欠けてゐるので長さは不明であるが、図17右下の例は花瓣は細長く、先が強く反つてゐる。図16のやうな花瓣の短い表現の花は殷墟にある。図18は戦前の殷墟西北岡発掘の孟で、底からこの花が立ち、その茎には環がはまつて一対の龍が作りつけられ、水を張ると花をめぐつて龍が泳ぎ廻るといふ趣向である。図19は殷墟婦好墓の遺物。龍はないが花と茎は相近い。図1819で開いた

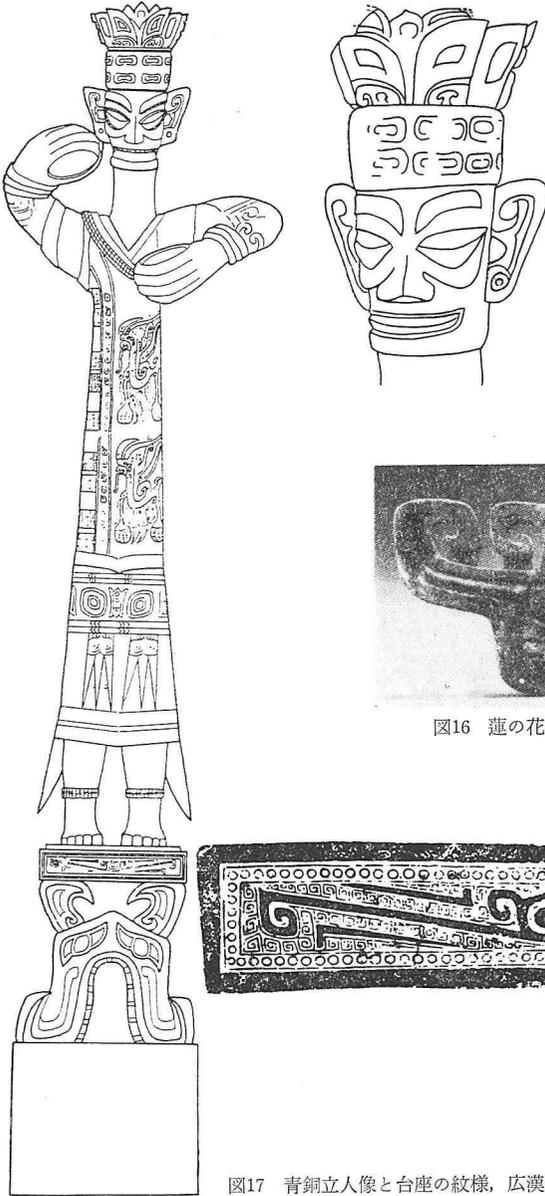


図16 蓮の花を戴く饗餐，広漢三星堆2号坑



図17 青銅立人像と台座の紋様，広漢三星堆2号坑

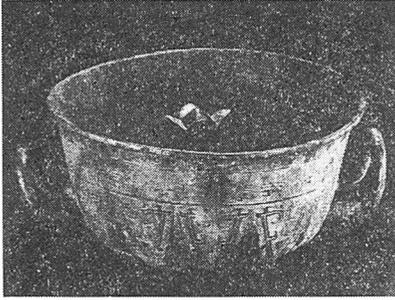


図19 中に蓮の花の立つ容器, 安陽殷墟婦好墓

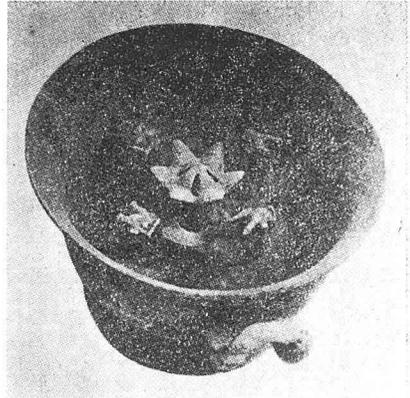


図18 中に蓮の花の立つ盃, 安陽殷墟西北岡

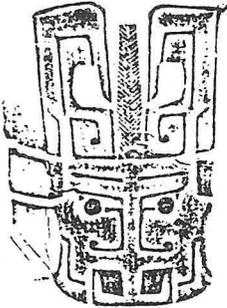


図22 長い板状の匱形飾をつける饗養, 玉器

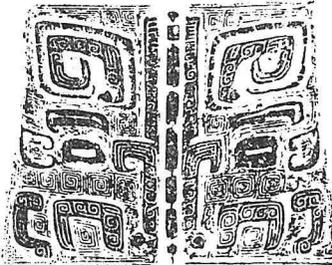


図21 長い板状の匱形飾をつける饗養, 罍, 殷墟婦好墓

図23 長い板状の匱形飾をつける饗養, 尊, 廣漢三星堆2号坑



図24 長い板状の匱形飾をつける饗養, 尊, 廣漢三星堆2号坑

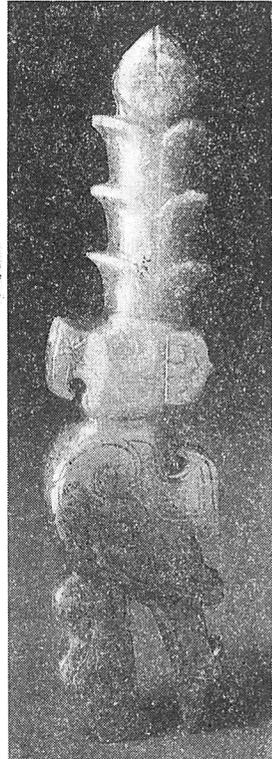


図20 蓮の花を戴く鳳凰, 故宮博物院

花瓣の中にある円味をもつた円錐形のものには細長い切り抜きがあり、そこがつぼんだ花瓣であることを示してあるごとくである。

図18の例について先に中国古代の蓮の花の象徴について考察を加へた際、これを蓮の花と考へた^②。三星堆の神樹は頂に大きな蓮の花をつけてゐることになる。蓮の花は長い茎の上に咲く。横枝のない真直な太陽柱の幹の頂に着く花は、蓮の花たるにふさはしい。

ここに問題の青銅製の神樹を始め大型の人頭など、三星堆の文化には殷にないものがあり、宗教において相当独自の表現を持つてゐることは疑ひない。一方、青銅製の彝器や玉器には殷を代表とする華北の文化の宗教の系統を引く道具だてがあり、従つて宗教に係る諸観念、祭儀を共通にしてゐたことが察知される。また宗教に係る観念の表現である図像の表現形式も殷そのものと言へる。例へば三星堆に独特な図17右下の神像の台座の紋様のごときである。この点からみて、殷墟出土の殷後期の遺物上にみる蓮の花を三星堆の神樹の花と比較することには特に問題はないと考へる。

右に見た所により、三星堆の神樹の花が同時代に蓮の花と見られたことが知られた。漢時代に若木の梢に咲く花が蓮の花の有様のやうだ、と記されたことは九九頁に引いた通りであるが、これはおそくとも前千年頃に遡ることが知られたのである。

また若木が西の極に付くと記されることを先に引いた(九九頁)。漢時代頃、天には東西南北四方に柱があり、その各々に極、すなはち水平方向の棟木が嵌つてゐると考へられてゐた。^③昆侖の西にある若木はその内の西の棟木に接してゐる、といふのである。若木の上に咲く花は時と共に開いてゆき、図11のやうな状態の上端接弧、およびそれと重なるパリー弧が後の時代に戴と呼ばれ、「直」のごとくで上が微かに持ち上つてゐると記されたことは先に記したごとくである(一〇二頁)。太陽の上方に「直」のごとき状態になつた上端接弧、パリー弧が出現してゐる状態は、天上に「極」が現れた形と言へる。若木が西極に付く、といふのはこの暈によつて生れた所伝と考へてよいであらう。

以前に中国古代における蓮の花の象徴について考察した時、漢時代に東西南北四方の星座の神として四神があり、中央の星座の代表である天極星(小熊座の竿状に並んだ星)の象徴としては図像で蓮の花(所謂四葉形)があつたことを記した。^④その時その星座中の一番明るい星β星が日を司り、帝王であり、太一の座である『晋書』天文志にあることから、太陽と結びついたものとしての蓮の花がそこに使はれたのだ、と考へた。すぐ先に記した通り、始めに蓮の花の姿であつた暈は時間の経過と共に開いてゆき、棒状に変化して「極」に変わる。つまり蓮の花と極とは一つのもの

の二つの様態であるといふことが知られた。漢頃に天の運行の中心のすぐ近くにある天極は極（棟木）と呼ばれるにふさはしい形で星が並ぶ。この極は日の暈ではなく、下に「天柱」が現れることとはないとしても、若木の上の極からの類比で、圖像としては蓮の花で象られた、といふことは主要な説明として第一に挙げるべきであつたと考へる。

頭上の冠に太陽柱の上方に現れる蓮の花を着け、同じ蓮の花を飾つた台の上に立つ図17の神は、さう思つてみると頭に比べて不釣合に背が高く、柱のやうである。手を除外してみると全形は図12の西王母の坐る崑崙山、その原形の太陽柱に近い。これが日の昇降を司る神といふことは大いに有り得ることと考へる。両手に持つてゐたものによつて何かの手掛が得られるかどうか、今後の報告に俟つて他ないが。

図16は先に引いた時に記さなかつたが、額に蓮の花をつける点において、股、西周に数の多い饜饜の中に類を見ない、極めて珍しいものである。天の蓮の花に象徴される属性を持つた神と考へられる。しかしそれ以上のことは今の所明かでない。図20の鳳凰は頭上に図16の額に載くのと同じものを着けるが、つぼんだ花瓣が高く露れてゐる点は図2、3に近い。茎が長く、図16で花瓣と見たものが三段になつてゐる。蓮の花の下の若木の幹がこのやう

な形に表はされることがあつたと思はれる。饜饜や轅首で額に密な横線の入つた長い板状の篋形飾を着ける例は股ごろの遺物に少くない。図21の当該部分の上部、図22、24の当該部分がその例で、表現型式は様々であるが、図23のやうな弧を二つないだ形の横線の入るものは、図20の鳳凰の頭上の若木の幹の表現と形が近く、この類のヴァリエーションといふことは考へられることである。

図21、24に見る類が、同じ所に飾られる羽子板形等のものと比べ、著るしく長いことはこの想定を裏づけるものである。図16では花が付くが、普通には幹だけ、すなはち花なしの天柱、銅柱形だけを着けてゐるといふことになる。この類の内、図23のやうに弧を二つないだものを重ねる類は、よく龍とか蛇形の神の鱗に使はれる表現と共通である。この類をとり上げたのは、先に扶桑、若木の同類として注⑨に引いた建木について、「その状は牛のやうで、これを引くと皮があり、纒や黄蛇のごとくだ」といふ不思議な記述があることに関連してのことである。牛のやうだ、といふ記述が何を意味するかについては、ここに手短かに説明することはできないが、皮が黄蛇のやうだ、といふ記載は、この図23のやうな神の戴く、蛇の鱗と同じ表現を持つた太陽柱の象徴に由来するのではないか、といふことを言はんがためである。

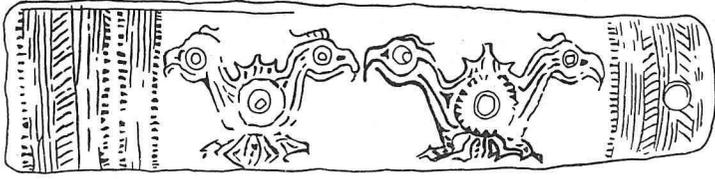


図25 双鳥の負ふ日と月，骨匙，餘姚河姆渡

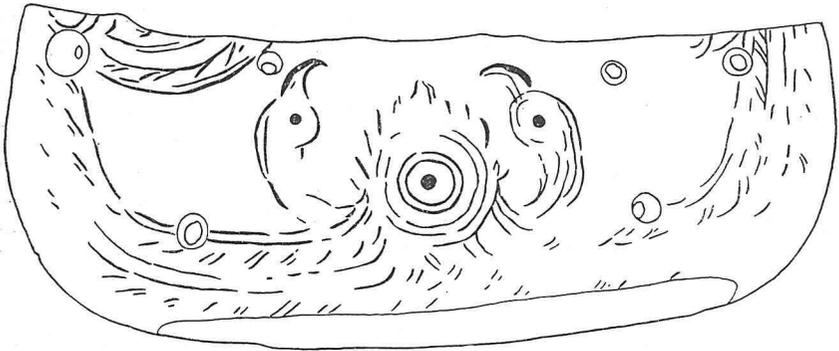


図26 双鳥の負ふ日ないし月，象牙飾板，餘姚河姆渡



図27 内暈，幻日，上端切弧，Greenler 1980 より

三星堆出土の「神樹花果」に関連した論考は以上である。太陽の暈の写真とか、現れ方の図を見てみて他に中國古代の神話的圖像がこれで説明できるはずだ、と気付いたことを若干付け加へておきたい。

第一は以前にも引いた河姆渡文化の日月の図（図25、26）で、左右から鳥が日や月を挟む圖像である。天上で鳥が日や月を運ぶ図としか考へ様がないが、疑問に思はれるのは、このやうな形では鳥は飛べないどころか、地上で動くこともできない、といふことである。第一、二羽が一緒に運ぶ必要はない。本当に鳥が日や月を空中で運ぼうといふのなら、例へば漢代画像石にあるやうに、一羽が背中か胸に密着させて、翼が自由に動かせるやうな形をとらせるべきではないか。空を運行するといふことで鳥に結びつけられたのは理解できる。それがこのやうな形に画かれるについては、幻日、幻月が鳥の頭に見られたからに相違ないのである。図7でDDとLLの交点に太陽があり、Cに現れるのが幻日、幻月である。

幻日は幻日環の上に、太陽から視半径²²より外の左右の位置に現れる光点のことで、普通は白色であるが、赤味がかつていることもある。……幻日は太陽高度が低いときのみに現れる。月の場合は幻月といふ。^②

といったものである。図5の写真の左方にその片方が写つてゐる。図27には内暈、幻日、上端切弧が写つてゐる。この三種はかなり多く一緒に現れるといふ。^③ 図25は幻日と内暈の下半、それとこの写真には写つてゐない下端切弧（図7'E'E'）を外向きの一對の鳥に見たてたものに相違ない。図25で日の上にある火炎形は上端切弧に当ることはない。また図26の方は幻日と内暈の下半を内向きの一對の鳥に看做したものである。これらは鳥が物を空中に運ぶには不適當な姿勢ではあるが、実際に見えるのがこのやうになつてゐるのであるから、これは理窟ではない、仕方がなかつたのである。

ここで興味深いのは次のことである。すなはち、図25で上端接弧に由来すると考へた上辺の火炎形、下端接弧に由来すると考へた鳥の足等は、中にある円の外に接してゐることである。右の筆者の考へが正しいとすると、それらの暈の接するのは日そのものではなく、その外、視半径²²の所をとり巻く内暈（図7）であるから、図25の円盤は日ではなく、その内暈を象つたもの、といふことになる。日そのものはさうするとその中心にある小さな円といふことになる。だからこそ、図25で右図の円の内側に鋸齒紋が入れられ、中心の小円の太陽からの強い光線の輝きが内暈の内側にある——図27の写真にその様子が写つてゐる——のである。



図29 良渚文化神面に伴ふ
目と鳥の合成図像，琮，
上海福泉山



図28 良渚文化神面に伴ふ目と鳥の合成図像，琮，餘杭半山



図31 上端接弧とバリー弧，幻日，Greenler
1980 より

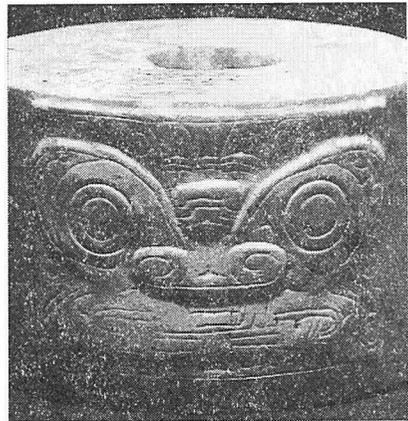


図30 良渚文化神面の目頭の三角形

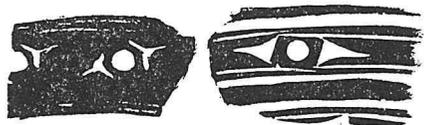


図32 三角形と円の紋様，良渚文化早期土器，
吳興龍南

さきに筆者は玉製の璧について考察を加へ、漢代の璧が日月そのものの象徴ではないが、それらと共通する性格——大いなる陽の氣、大いなる陰の氣のかたまり——を持ち、これは河姆渡の中央に円の入った円盤（図25）の形で表はされた日月に由来するものではないかと考へた。^④ 今図25の河姆渡の日月の円盤の中心の小平（本来何かが象嵌されてゐた）が日、月そのもので、それと外側の円周——内暈——の間は日、月の「氣」に当る部分であるこ

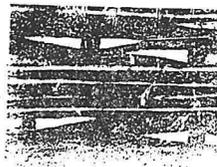


図34 三角形の紋様，良渚文化早期土器，興澄湖古井



図33 三角形と円の紋様，良渚文化早期土器，興澄湖古井

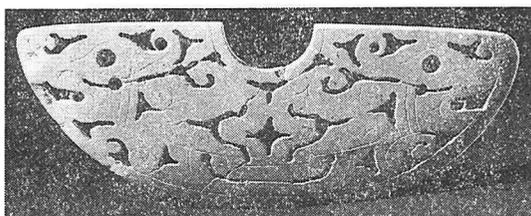


図35 良渚文化神面の随所に嵌められた三角形，餘杭瑤山

とが明かになつた。璧は日、月そのものではなく、その「氣」の部分に該当する玉器であるとした、筆者の先の判断がより明確になつたわけである。

さて、先に筆者は良渚文化の逆梯形器やそれに神面を表はしたものが河姆渡文化の図25のやうな日、月の圖像に由来することに注意し、逆梯形器等の神面の両側に目と鳥の要素の合成の圖像（図28、29）が現れるのは河姆渡文化の日月の像の両側の鳥の大きな目がこの形で再生したと考へた。そして目と鳥の要素の合成圖像が殷時代の青銅器上で、饕餮の左右に所謂夔龍の形で再び出現することに注意した。^⑤ その際大きな目に鉤形の嘴とか鳥の頭、目の前下方に意味不明の羽根のやうな突出物が加はるといふやうな何とも奇怪な圖像と記した。図27の幻日の写真を見れば直ちに寛られるやうに、この圖像は図25、26の頸から下が消え、幻日とその内側の内暈の一部が、このやうな鳥の要素として幻日に付属した圖像で表はされたものに他ならない。殷時代のものも含め、各様な形をとるが、一々についてくだくだしく記すこともあるまい。

幻日で説明できるものとしてさらに次のものも挙げられよう。図25の河姆渡の日月を挟む双鳥の目の直前にある小さい三角形である。先に前引の論文の中でこれに注目し、これが何を表はしたものが明かでないが、それに対応する図形が良渚文化の神面の目

(図30)にもあることから、両者が継承関係にあることの一証とした^④。河姆渡の神鳥の目の直前に加へられた三角形が、図31の幻日とその外に延びた光、および内側の内暈の一部が加はつた形であることは明かであらう。図30などは図31に写つてゐるやうな形をよく存してゐて、製作者がその由来についての知識を持つてゐたのではないかと疑はれる。

良渚文化には土器の紋様で円の両側に三角形ないし三叉形を加へたものがある(図32、33)。これらは日と幻日がその原形を離れて目玉と目尻、目頭といつた形に変化したのではないかと考へられないであらうか。幻日に由来する三角形は、良渚文化において何かそれだけで独立した意味を荷つた図形と看做されたと考へられる。図34のやうな用例も見出され、図35のやうに神面の随所に嵌めこまれるやうな用法も少くない。その用法は他にもいろいろ見出されるが、ここでは紙面の都合もあり、詳論しない。

幻日は図31に見るやうな上下に内暈と連なつた形で後の時代に珥と呼ばれた。『釈名』釈天に

珥、氣在日兩旁之名也、珥、耳也、言似人耳之在兩旁也

と、すなはち、珥とは氣の日の兩側にあるもの名である。珥とは耳といつた意味である。人の耳が兩側にあるのと似てゐること可言ふ、と。『釈名』には暈の類として暈と珥の二つだけが挙げ

られてゐる。割合と頻繁に見られるからであらう。

他に暈を原形とすると思はれる圖像として図36(1)~(3)のごとき大汶口文化の土器の記号、同図(4)のごとき良渚文化の型式をもつた珠に刻された記号がある。この類を文字として読まうとする試みがなされ、例へば図36(3)を構成する要素を上から順に日、火、山と見てこの三つを合せて楷書の文字に改めるときである。これらを文字として読むことは問題である^⑤。しかし文字として読まないにしても、これらが記号として如何なる要素で構成されてゐるかを正しく認識することは必要である。先づ一番上が「日」を象することは認めてよいと考へる。これを日とした場合、そのすぐ下の要素の各種に統一的な解釈を加へることができからである。上の円の下に組合はされる要素としては図36に引いたやうに、三日月の内側に尖りの出た形(同図(1))、し字形を鏡対称形に組合せた形(同図(2))、それと三日月形(同図(3)(4))の三種が知られる。これらは同じ要素と認めてよいものかどうか、従つて円とその下のこれらの要素を組合せたものは同一の記号といふことになるか、さうとするとそれはどう説明されるか。それは太陽の暈である。図10に引いたのは太陽の circumscribed halo (以下外接暈と訳す)、バリー弧、入れ替りバリー弧のシュミレイションの図の一

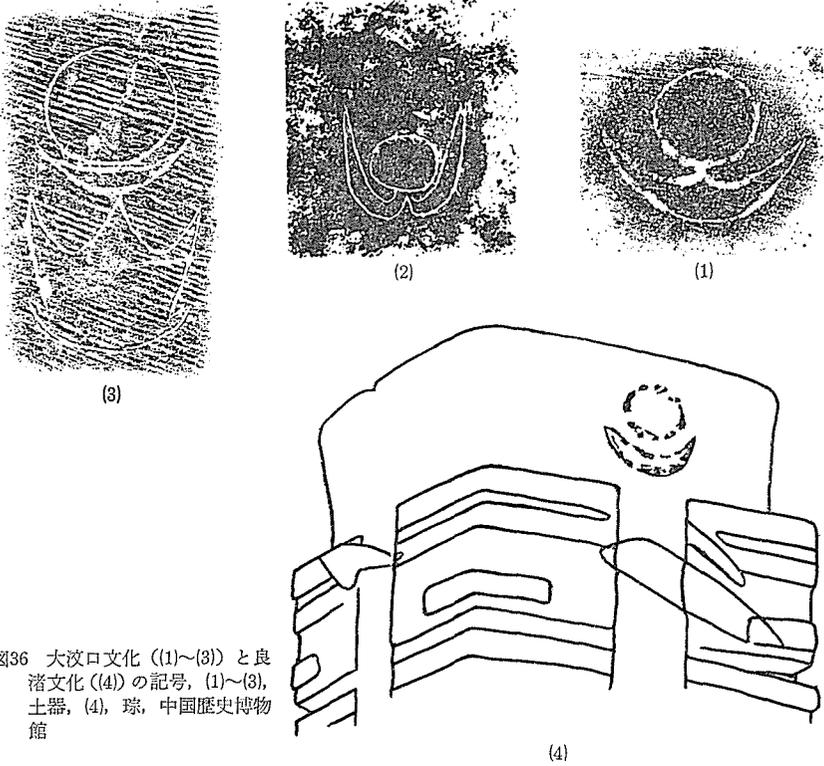


図36 大汶口文化 (1)~(3)と良渚文化 (4)の記号、(1)~(3)、土器、(4)、琮、中国歴史博物館

部で、太陽が40°、50°の高さに昇った時の図である。細い実線の円は内暈の範囲を示す。写真を見ると内暈も同時に現れてあるが、薄くしか見えないので挿図には引かなかつた。図36(1)は40°の外接暈に、同図(2)は40°のバリー弧に^⑩、同図(3)は50°の外接暈、バリー弧に対応してゐる。これら大汶口文化の円の下に組合される要素の各種は、時間の経過と共に形を変へてゆく太陽の暈の或る段階のものを象つたもので、太陽の下に現れる同じ暈の図といふことになる。そして図36で円とその下の暈が密接してゐる所から、先に図25について注意したのと同様、上の円は太陽そのものではなく、外の22°の暈(内暈)を含めたものの図像といふことになる。

なほここに引いたやうな暈は『晋書』天文志、中に

氣如半暈、在日下為承

と、すなはち、氣の半暈のごとくして日の下にあるを承となす、と、承と呼ばれてゐる。^⑪『天元玉曆祥異賦』の「日下承氣」に図36(4)のごとく、内暈の下に上反りの三日月形が画かれ図10の外接暈の40°、50°と

内景の重複したものは『管窺輯要』（巻九、三〇葉）に「日有交暈」として図がある。ここにとり上げた類の暈が、後の時代にも中国世界で注意されてゐたことが知られる。

以上中国古代の図像、図形で暈と係りのあると思はれるものをとり上げて論じた。暈については Greenler 1980 から専ら知識を得たが、この有用な書物の存在を教示下さり、長い間御貸し下さった長崎大学教育学部地学教室荒生公雄教授に深い感謝の意を表したい。また関係資料については日本文化研究センター教授山田慶児氏、平凡社事典応答室長柳下弘寿氏にもお世話になつた。併せて謝意を表する。

- ① 四川省文物管理委员会等一九八七、一三頁、四川省文物管理委员会等一九八九、一九頁。
- ② 四川省文物管理委员会等一九八九、一九頁。
- ③ 陳一九八九、二〇頁。
- ④ 同右。
- ⑤ 四川省文物管理委员会等一九八九、一一頁。
- ⑥ 陳一九八九、一九頁。
- ⑦ 陳一九八九、一七、一九、二〇頁。
- ⑧ 劉文典の『淮南鴻烈集解』に『文選』潘安仁、西征賦注引等に陽谷を湯谷に作ることを引く。
- ⑨ 他に建木といふ木がある。『山海經』海内經に
有木青葉紫莖、玄華黃実、名曰建木、百仞無枝、有九櫚(枝)回曲也……、下有九栲(根盤曲也……)、其実如麻、其葉如芒(芒不似棠

梨也)、大皞委過(言抱轅於此經過也)、黃帝所為(言治護之也)と、すなはち、木があり、葉は青、莖は紫、花は赤黒く実は黄色で、建木と呼ばれる。百仞の間枝がない。(その上方に)曲りくねつた枝があり、下にはぐねぐねと交錯した根がある。その実は麻の実のごとくで葉は芒のごとくである(芒木は葉梨(こりんご)に似る)。大皞はここを過り(抱轅がここを通り過ぎたことをいふ)、黃帝が治めたところである(これを手入れし保護したことをいふ)、とある。幹が百仞もの高さにわたつて枝がない点は若木と通ずるが、上に曲りくねつた枝がある点に大きな違ひがある。また『山海經』海内南經にはこの木について

有木其狀如牛……其名曰建木

と、すなはち、木があつて牛のごとくで……その名を建木といふ、とあり、牛に似ると記され、柱状の若木とはさらに大きな違ひがある。またその位置も『淮南子』墜形訓に

建木在都広、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也と、すなはち建木は都広にあり。衆帝のここから上下する所である。日が中すると影がなく、呼ばはつても反響がない。思ふに天地の中心である、といひ、日の上下する東西の果てとは相違する。

やはり恐しく高い柱状の木は他にも『山海經』中にある。北山經に……涇山……三桑生之、其樹皆無枝、其高百仞

と、すなはち、涇山があり……三桑がそこに生えてゐる。その樹はみな枝がなく、その高さは百仞である、と。また海外北經に

三桑無枝、在歐絲東、其木長百仞無枝と、すなはち、三桑は枝がない。歐絲の東にある。その木たるや長さ

が百仞の間枝がない、と。また大荒北經に

東北海之外……附禺之山……有三桑無枝(皆高百仞)と、すなはち東北の果……に附禺の山があり……三桑があり、枝がな

い。みな高さ百仞ある（郝懿行は『箋疏』に終りの注は本文が誤つて注とされたものといふ）、といふことである。北山經にはその山の木がみな枝がなくて高さが百仞といふから、これは若木のやうな独立樹ではないと見られてゐたらしい点、別に分類すべきものと見た方が良さうである。この木についてはそれを伝つて何かが昇降するといふ話もない。海外北経に

尋木長千里、在拘瀾南、生河上西北

と、すなはち尋木は長さ千里、拘瀾の南にあり、黄河のほとりの西北に生えてゐる、といふのも同様、日との係りを缺く類である。

⑩ 太陽柱は平たい面をほぼ水平に、空中を落下する細かな六角板状の水の結晶に太陽光が反射することによつて現れるものと、長軸をほぼ水平に空気を落下する細かな六角柱状の水の結晶の反射によるもの、両種がある。図5は前者、図6は後者であることが、下に添へられたコンピュータによるシミュレーションによつて確かめられてゐる (Greener 1980, pp. 66~72)。

⑪ 上端切弧については注⑩参照。なほ図7に見るやうな各種の暈は空中の六角板状、六角柱状等の水の細かい結晶によつて生ずるものである。それらがどのやうな状態で空中にあり、太陽ないし月の光をどう屈折ないし反射をした時にどのやうな暈が現れるか、といふやうなことを概説することは筆者のすることでもあるまいし、またここでは不必要であらう。

⑫ 「眡視掌十輝之灑、以觀妖祥、辨吉凶」（注、妖祥、善惡之徵、鄒司農云、輝謂日光灑也）

⑬ この方は赤くない。『晋書』天文志、中に
青赤氣長而立日旁為直

と、すなはち、青と赤の氣で長くして日の旁に立つのを直となす、といふのに相當する。

⑭ 図9の右に「暈有背琪直虹」とある。「背」は左右の單線の弧形の暈、「琪」はその内側についた二重の線の弧で表はされた暈である。

なほ他に『開元占経』日占一、日変色の項に

荆州占曰、日始出、一竿赤如血、有死王、以宿占國

といふ赤い竿も太陽柱と思はれる。

⑮ 正野一九五八、一四四頁。

⑯ 上端接弧もパリー弧も空中の六角柱状の細かい水の結晶によつて太陽光線が屈折されることによつて生ずるものであるが、結晶が長軸をほぼ水平に、回転してあると上端及び下端接弧が生れ、同じ形の結晶が長軸を水平に、相對する面が水平乃至垂直である時に夫々パリー弧と入れ替りパリー弧 (Glennan-Parry arc) が生れる。太陽の光線の通る空氣の異なつた層の中にこの二種の異なつた水の結晶の状態があると、両者が重なつて見えることになる、と説明される (Greener 1980, pp. 40~41)。

⑰ これは六角平板状の水の結晶の反射によるものであるが、日の高さによつて形、高さは少しづつ變化する。六角柱状の水の結晶の反射によるものの場合も同様である (Greener 1980, Fig. 3-4, 3-5 参照)

⑱ 林一九八九、三七~三九頁。

⑲ この四字『文選考異』による。

⑳ 林一九八九、三〇頁、図23。

㉑ 『漢書』天文志「暈適背穴」について注に引かれる孟康の解釈に穴多作鑷、其形如玉鑷

といふ。この鑷は鰓、鏹とも書かれ、弧形に彎曲し、先の尖つた、結び目を解く道具である (林一九七六(編)、図2-107)。同注所引の如淳の説に

有氣刺日為鏹、鏹、扶傷也

と言ふ。日を刺す暈といふと幻日環と日面通過弧であるが、鏹のやう

に彎曲したものといふと後者だからである。この暈の λ 字形の縦半分だけが見えろと(中国氣象局一九七六、図90)丁度縮形になる。

② 『管窺輯要』卷九、二四「氣相交穿」の相似た図などがこれの写し崩れとも見得よう。

③ 林一九八九、二五六頁。

④ 林一九八九、一三頁。

⑤ 林一九八九、二二六～二四二頁。

⑥ 漢時代頃の恒星運動の中心である星は小熊座の一行に並んだ星の北への延長線上にあった(林一九八九、二四〇頁)

⑦ 林一九八六、図版5-14、10-12、11-38等。

⑧ 南陽漢代画像石編輯委員會一九八五、五一八～五二四。

⑨ 正野一九五八、一四三～一四四頁。

⑩ Greener 1980, p. 28.

⑪ 林一九九一、三四〇頁。

⑫ 林一九九一、三〇八～三一〇頁。

⑬ 林一九九一、三一〇頁。

⑭ 林一九九一、二九九～三〇〇頁。

⑮ 図31の写真で幻日の外に長く延びてゐる光は、空中を落ちてくる水平に近い六角板状の水の細かい結晶を、最小偏角よりも大きい角度で屈折した太陽光線によつて生れたものである(Greener 1980, p. 27)。幻日は太陽が低い時は内暈と同じ位置にでき、日が昇るにつれて少ずつ外に離れてゆく(Greener 1980, p. 27)。

⑯ 王一九八六、二四九～二五〇頁。

⑰ 林一九九〇、注③。

⑱ 図36(4)の記号は以前に同図(1)の形として報ぜられ、筆者もそれを引用した(林一九九〇、一一九～一二〇頁)。しかし一九九〇年秋から中国歴史博物館に展示された遺物には、図36(4)に示したやうな記号が

刻まれてゐた。

⑲ Greener 1980, Pl. 2-13-15.

⑳ グリーナーは40のパー弧の形はシュミレーションでは知られるが報告された例はなご、と記す(Greener 1980, p. 44)。

㉑ 『開元占経』卷七、日承の項所引の夏氏も同じことを記す。

図出所目録

図1 四川省文物管理委员会等一九八九、図二四

図2 広漢市文物管理处展示、筆者写真

図3 筆者写真

図4 Greener 1980, Pl. 3-1.

図5 Greener 1980, Pl. 3-3.

図6 Greener 1980, Pl. 3-4.

図7 正野一九五八、第9・10図

図8 『天元玉曆祥異賦』(内閣文庫、明写本)

図9 『管窺輯要』卷九、三六葉

図10 Greener 1980, Fig. 2-10.

図11 Greener 1980, Fig. 2-16.

図12 林一九八九、第五章附図2

図13 林一九八九、第二章、図22

図14 Greener 1980, Fig. 3-30.

図15 『天元玉曆祥異賦』(内閣文庫、明写本)

図16 四川省文物管理委员会等一九八九、図版三、3

図17 左、同右、図六、下右、同、図七下、上右、筆者図

図18 陳一九五四、図版八、図10甲

図19 中国社会科学院考古研究所一九八〇、彩版五、1

図20 楊一九八六、七五

図21 中国社会科学院考古研究所一九八〇、図一三、2

- 図 22 筆者拓本
 図 23 四川省文物管理委员会等一九八九、図四〇
 図 24 同右、図一六
 図 25 林一九九一、第四章、図 4-39
 図 26 同右、第四章、図 4-40
 図 27 Greenler 1980, Pl. 28.
 図 28 浙江省文物考古研究所等一九八九、図八
 図 29 筆者写真
 図 30 浙江省文物考古研究所等一九八九、図六九
 図 31 Greenler 1980, Pl. 27.
 図 32 蘇州博物館等一九九〇、図四八、1~3
 図 33 南京博物院等一九八五、図二六、1
 図 34 同右、図二六、2
 図 35 浙江省文物考古研究所等一九八九、図一五九
 図 36 (1) 王一九九一、図四
 (2) 同右、図五
 (3) 同右、図七
 (4) 観覧者撮影写真より筆者描き起し
 引用文献目録
 王樹明一九八六「談陝陽河与大朱村出土的陶尊」《文字》『山東史前文化論文集』濟南
 王樹明一九九一「大汶口文化發現陶尊与陶文字綜述」『故宮文物月刊』九四、五八~七三頁
 四川省文物管理委员会、四川省文物考古研究所、四川省広漢県文物局一九八七「広漢三星堆遺址一号祭祀坑発掘簡報」『文物』一九八七、1〇、1~15頁
 四川省文物管理委员会、四川省文物考古研究所、広漢市文化局、文管所

- 一九八九「広漢三星堆遺址二号祭祀坑発掘簡報」『文物』一九八九、五、1~20頁
 正野重方一九五八『氣象学總論』（『氣象学講座』第一卷）、地人書館
 浙江省文物考古研究所、上海市文物管理委员会、南京博物院一九八九『良渚文化玉器』北京
 蘇州博物館、吳興県文物管理委员会一九九〇、『江蘇吳興龍南新石器時代村落遺址第一、二次発掘簡報』『文物』一九九〇、七、1~27頁
 中国氣象局一九七六『中国雲図』北京
 中国社会科学院考古研究所一九八〇『殷墟婦好墓』北京
 陳頭丹一九八九「三星堆一、二号坑幾個問題的研究」『四川文物』一九八九、広漢三星堆遺址研究專輯、1~22頁
 陳夢家一九五四『殷代銅器』『考古学報』七、15~59頁
 南京博物院、吳県文管会一九八五『蘇州吳興澄湖古井群の発掘』『文物資料叢刊』九、1~23頁
 南陽漢代画像石編輯委員会一九八五『南陽漢代画像石』北京
 林巳奈夫一九七六（編）『漢代の文物』京都
 林巳奈夫一九八六『殷周時代青銅器紋様の研究—殷周青銅器綜覽二—』東京
 林巳奈夫一九八九『漢代の神祇』京都
 林巳奈夫一九九〇『良渚文化と大汶口文化の図象記号』『史林』七三、五、116~134頁
 林巳奈夫一九九一『中国古玉の研究』東京
 楊伯達一九八六『中国美術全集』工藝、9、玉璽
 Greenler, R. 1980: *Rainbows, Halos, and Glories*, Cambridge University Press, Cambridge etc.
 (京都大学名誉教授)